

風景畫の變遷——佛蘭西の印象

黒田清輝氏談

●昔から風景畫が無いではない、併し純粹の風景畫として一つの畫面を作り、單に夫れだけの趣味を現はさうとするやうになつたのは、比較的近頃の傾向のやうに思はれる。古い所では人物が主で、風景は其の背景として附屬されて居るに過ぎぬ。而して其の背景たる風景には、幽邃な山水の趣なども無いではないが、先づ多いのは人間が多く棲息して居る市街とか、或は立派な建築の周圍に、樹木などが書いてあるとか、或は丘や山のやうな土地の中に人家があり夫れが大抵細かく描かれて居て、其の前景に人物が大きく出て居ると云つた風のものであつた。たとへば伊太利の壁畫などを見ると前述の様な工合の風景の中に、人物が活動して居る姿を描いて有り、全く風景と見做すべきものが少ない、又僅かに立木が一本か二本か立つて居る地盤に、何か側に人物か動物でも添へてある。つまり背景を全く拵へぬのも古い壁畫などに見える、たとへばボムペイから掘起された古壁畫などの多くは風景の部分は至つて簡單で、人物の動作のみが重なるものになつて居る。

歐羅巴の古い繪畫は、兎角人物が主になつて居る、佛蘭西でも矢張り伊太利の系統を引いて居るので、一五〇〇年代に佛蘭西のラハアエルとして有名なブーサンなどを見ても、矢張り伊太利系で人物を前景に並べ、背景に景色を添へて居る、併し此人の景色は殆んど寫生の様な立派な筆致である。又た此同時代頃にクロード、ローランと云ふ畫家がある、此人は今日では風景畫家と目されて居り、又た風景畫家の元祖と云つても好いのであるが、之は人

物を附屬に添へたゞけで、其の作品の全部から云へば純然たる風景畫家とは云ひ難いやうである、其畫風の大體は夕日を帯びた港の雜沓などを畫題にして其の落日の光の工合を誠に驚くべきほど巧みに描いてある、是れは風俗的風景畫である又山や川に歴史的人物を添へて、一方から見れば歴史畫とも見られる様なものをも試みて居る是れは歴史的風景畫と云ふべきものであらう而して單獨に景色許りを畫いたのは殆んど見えぬ、恐らく無いのであらう。

●風景許りの繪畫を描いたのは和蘭の畫家には大部見える其の中重に誰でも知つて居る人はリユイスタエルとて一六〇〇年代の畫家である。和蘭のやうな細く平凡な、牧場などの平地の多い土地に生れて、山や川の頗る勝れた風景畫の出たのは一寸不思議に思はれる、が、併し風景畫が發達して獨りリユイスタエル許りで無い、知名なホベマなどの大家も出て、百姓家や水車などの、幽邃の致、清麗の極を盡した作品が澤山に出來た、尤も其頃とても前に云つた様な動物や人物に風景を副としたものが大部分を占めて居る、ポール、ポテールなどになると、矢張り多く動物を主として風景を描いて居るのである、けれども實際純然たる風景畫家は、和蘭の此頃に於て始めて發見されるのである。

●夫れから後の人で、風景畫を描いた人は方々の國にあるが夫は大抵今日の様な、或る場所に就いて面白い趣を描き現はすと云ふのでは無く、日本や支那で山水を描くやうに拵へた山水が多い。矢張り山があつたり川があつたり、都合の好い處に林があつたり、山道を作つたり、甘い工合にいろ／＼の道具を配合する、所謂、構成した風景畫で、今日の目で見ると只美しくいと云ふ丈で何の趣味も無いのが多い。

●十八世紀の佛國にワトーと云ふ畫家がある、此人の繪は人物が主ではあるが小さい人物を大きい風景の中に入れてあるたとへば公園の様な處に、靚装をした男女が面白く散歩をして居る様な優美な畫風で、而も配色が裝飾的で非常に面白い、が之れとても矢張り純粹な風景畫では無い。本當に風景畫の發達したのは、至つて近世で此の五六十年前のことである、佛の自然派の畫家コローなどは、風景の中に人物を入れて描いたのか多いが、先づ風景が重なるものである、此外ドキニー、ルーソーなども皆な人物や動物を描いたが、所謂風景を主にしたものも中々多く描いて居る、即ち自然の趣味を感得し、其の感銘した趣味を現はして居るのであるから、風景其もの丈で已に味がある。又トロワヨンとか、ミレーなどになると、前に云つた人々よりも人物動物を多く主として居る傾きはあるが、此の方のも全く自然の感銘其のまゝを、詐はらず飾らず畫面の上に投影したので、拵へ物で無い。従つて副物の風景が中々面白が多い。夫れに續いても少し新しい印象派の畫家は、皆な巧に風景を描いた、此派の畫家は何れも人物よりも殊に風景畫に秀で、居る人が多い。

●偕て翻つて我國を見ると、我國の畫家は、元々人物には不得手で、昔から人物畫として秀でた手腕を持つた畫家は極めて少ない、今日洋畫を習ふところの吾々は、殊更力を用ゐて研究して居るが、夫れでも容易なことでは人間らしいものが描けぬ。之は日本人の缺點であるから、成るべく工夫をして此の缺點を補いたいものと思ふ。併し一體の日本人の性質から云ふと、吾々には風景畫の方が解り易い、油畫を習ふものが二三年も稽古すると、立派な風景畫が出来るが、偕て人物畫は中々描けぬ。今日諸種の大小の展覽會に風景畫が大部分を占めて居るのは止むを得ない、今まで西洋畫をやつた者で、外國にでも居て、人物畫本位の國で養成された者は多く人物を主にして居

るが、之は風景畫家に比すれば比較的少數である、自分の知人としては故人になつた原田直次郎君、又は工業學校の教授をして居る松岡壽君など、皆な人物の畫家で、先づ人物本位と云つても差支無い。之に引換へて、日本で洋畫を研究した人達は、大體に於て風景畫家である。夫れで見ても日本人と日本の世界には、先づ風景の趣味が一番頭に這入り易いのであらう。併し風景畫を描くにしても、畫を描く大體の方法は知らねばならぬので、始めから天然と首引ばかりでは往く筈が無い、矢張り人物畫の修養を積んだ上で無ければ、美妙的な形状や色彩を描き現はすことは極めて六づかしいのである。

●風景畫の世界に於ける發達、及び日本現時の情勢は大抵こんなものである。風景畫の話をした序に、長く自分の棲んで居た、佛蘭西の印象を語つて見やう。

●先づ日本と佛蘭西を比較して見れば大體に日本の地勢には高低が多いが、佛國は平野に富んで居る、之は地圖を見ただけでも解る事であるが、日本は山が澤山あつて海に圍まれ、船の通ぜぬやうな急流が澤山ある、従つて日本の山國と云ふ處には、必ず溪川があり、高い山がある。而して山國と云ひ乍ら海には大した距離が無い、少し高い處では、一方に海の見えると云ふやうな處が多い。平均に云へば何里も續いて居る山林とか、見通しの付かぬ野原などよりも寧ろ海岸の凹凸した地盤に河があり、小川があり、小さい村が散在して居るやうな場所が多い、併し佛國のは主に麥畑とか、うねくした平たい地面があつて夫れに遠景に小高い丘が少し續いて居るといふやうな景色が多い、尤も佛國とて大山もあり海岸もあるから一概に云へぬが兎に角平たい國である。譬へば島なども夫れである、日本で島と云ふと相州の江の島とか、安藝の宮島とか、薩摩の櫻島とか何れも樹木があつて森或は林に

なり、溪間があると云ふ次第で、先づ何の事は無い山を海中に据えた形である、然るに佛蘭西の島は、樹木が少し位はあるにしても先づ大抵平地で地盤の低い草原の多いところで、巖があつても彼の千仞斧鑿と云ふ如き處は極めて尠ない、是丈でも既に日本と佛蘭西とは眺の上から非常に違ふ。更に其の違ふことは、佛には常磐木が少ないが日本には多い尤も那翁三世頃に植林したと云はるゝ赤松の林は處々にあり、又墓場には檜のやうな枝の垂れた常磐木はいくらもある。殊に佛の東方獨逸境の山などには澤山あるが、併し日本のやうな常磐木の大木が無い、日本には黒松の大木マツがあり、杉檜スギヒノキの林、森がある、夫に竹タケ藪ヤブは何處マダでも見るが、之が佛國には無い、僅かに巴里の公園に、寒竹が少し許り植ゑてある位なものであるから景色の趣が既に之れで亦大分違つて來る佛蘭西では又た日本と違つて落葉樹が多い、殊に最も佛蘭西的の重な景色を添へるのが、俗に西洋銀杏と云ふブープリエである、これは箒の様に真直に立つた樹振りで、日本の銀杏の幅が狭くて更に丈の高いもので、是は諸處にある。誠に見て壯快な感じがする。夫れが五六本も固まつて、廣い畑に立つて居る處は趣が殊に深い。

●次には牧場である。是は日本には至つて尠ないが、佛國には到る處にある。羊などが群を作つて牧場に遊牧して居つたり、或は夫れを牧夫が連れて街道の路傍の草を食せ乍ら悠々と導いて往くなどは、實際に畫の好材料である。

●夫れから一寸見た處の様子でも、田舎の耕作をして居る姿が日本とは違ふ。日本は處に依ては牛馬共に耕作に使役するのは先づ少い方だが、佛國では多く見る、又た畑の種類から云へば麥畑が多く、水田と云ふものは全く見當らぬ。此の二つが兩國大に趣を異にして居る。日本は到處水田で、佛國は到處麥畑である。殊に五月頃の麥

の熟する時分になると、一面の襪々たる黄金の波が眼界遙かに果てもなく連亘し、其の間に眞紅な美人草、空色の矢車などの交り咲いて居る處が、黄、紅、青、殆んど佛國の旗のやうな、極めて鮮やかな色彩の反映と對照を示す、此の畑の感じなどは、佛國に居つたものゝ、何時までも忘れられぬ、否な忘るゝことの出来ぬ感じであらう。

●此の外佛國の四季として、先づ春の野邊の有様を云へば落葉樹が多い丈に柔かい新緑の色はなんとも云へない又林檎の花は日本の櫻と違つて一種落着いた趣がある、春の草花で日本に多いのは蓮華草であるが、此は佛國では見た事はない、其代りに董の香芬鼻を衝くやうなのは、日本の野生董には殆んど見ることが出来ぬ異彩である。又水仙のやうな黄色の花で俗にクークーと云ふ花を或る年の春ブロールといふ處で澤山採つた事があつた。

●一體向ふの春は日本の春と心持が全く違ふ。同じ「長閑」と云つても長閑さが全く違ふのである。日本の春は極めてあはたゞしい、花が落ちたかと思ふと直ぐ暑くなる。空氣が重濁して陽氣と云へば陽氣だが、何か酒にでも酔つて居るやうな陽氣である、依つて精神も却て鬱陶しくなる、佛蘭西の春は花見も無い、梅も櫻もないが、中々いゝ心持である、此佛蘭西の春の特色とも云ふべきはリラとして、紫や白い色の花で高さ一間か五尺位ゐる樹に花が房になつて下る、全く香水のやうな香氣の高い花である。夫れも頭痛のする様な匂では無い、夫から一體の空氣が郊外に出ても市中に居ても、庭に逍遙しても何となく愉快な感じで、田舎の畠に立つて眺めると地平線の上は、日本の春霞にも似た一種の靄で包まれて奥行のある柔らかな色合である。其外市中には公園や何かにマロニエ即ち橡の樹が多く、丁度日本では檉の樹を家の周圍に植ゑて四角に剪んであるやうに佛國では公園の通り道などの兩側に皆な此橡樹を平かに剪んで植ゑてある。而して其の新芽の綠色を夜分は電燈が煌々と照らして居るので、見

た處綺麗且つ鮮かで、全く春の新らしい感じがある。

●佛蘭西の秋は淋しい秋である。第一日本のやうな紅葉が無い、紅葉の錦のやうな華美な秋は見られぬのであるが、佛蘭西には紅葉の秋では無く、黄葉の秋である。十月の半頃には少し霧のやうな雨が降つたりして洵に淋しい。

●夫から夏であるが、日本では山國である爲か、將た天然が自から之を然らしむるのか、近在に往つても、又た函根のやうな山谿に行つても、山百合の大輪の、香氣の高いものが野生で咲いて居る。こんな立派な野生の花は佛國には見られぬ、其代りに牧草が柔かで色々な花が咲いて居るから木陰を選んで寝轉ぶと何處となく好い香ひがして心が靜かになる、夫れから總じて佛國の夏の雰圍氣や日光は、先づ日本の秋の初頃位のもので總ての物が日本に比べて温かい色に見える。

●景色中の建物として佛國で日本よりも面白味に富んで居るのは、百姓家の屋根瓦であらう、日本の百姓家でも瓦葺も茅葺きもあるが、大抵瓦の色は灰或は鼠色に一致して居るが、佛蘭西の瓦は、薄紅或は朱色が多く、橡樹の間から其褐色を帯びた百姓家が隠現又は反映する色彩が好い感じを起す次に佛國には日本の家屋の塀の様に、黒澁塗の板塀や羽目などは決して無いから畫を作る上から都合が好い。

●曇天の多いのは冬である。一體佛蘭西は日本ほどに光線が強く無く、日本のやうに光つた日光がささぬ、大抵少し黄ばんだ光線を見ることが多い、中にも日光の一番弱いのは冬であるが冬には曇日が多い。雪の降る度は東京より少ないが、一度積んだなら一週間位は容易に融けぬ。寒さの度は攝氏の零度より以下に下ることもあつて東京よりも寒いのは勿論であるが、其の寒さもピリ／＼するやうな心持の好い寒さである。自分などは別に冬着を

拵へた事はない春や秋に着て居た着物其儘に、下に少し厚い膚着を着、上は外套だけで冬を通して居た。殊に家の構造が日本と違つて明つ放しで無いから寒さも至つて凌ぎ易い。而して一冬の中に五六回、濃霧のかゝる日がある。其の霧のかゝつた時は、瓦斯燈の火光もぼんやり見えて、行違ふ人の顔も臙ろ氣であるし、その頃は電車で無く、例の五階つきの乗合馬車であつたが、其の濃霧の日は乗合馬車の二階に立つて居る人の顔が、互に摺違ふ間にぼんやりと影法師のやうに見えて居るなども一寸忘れぬ霧の日の印象である。

●夫れから冬の紀念の一つは燒栗である、之は日本の燒栗とも比すべきもので、冬になると横町や町角に燒栗を賣つて居る、夫を四錢か五錢買つてポケットに入れ、手を暖め乍ら食つて歩くなども風流な一つである。又た日本の様に十月頃になつて時雨るゝ時はプープリエが眞黄色に黄葉し、黄葉すると間も無く散る、其の間僅かに十日間位あの處なので、繪を描くにも其の惶たゞしい處を急いで描いて了はねばならぬ。又た其頃になると、フォンテナブローの森の中の散歩が好くなる、此森の側にバルビゾン村とてミレーやルーソーの棲んで居たので有名な場所があり、其村は殆んど森に喰付いて居る、其村に居て朝晩に此森の中を散歩したものだ、森の大部分は、シエーヌと云つて榎のやうな二圍へもある大木が繁つて居て處々に松林もある、その周回は三四里もあらうが、全體が砂地で岩が多く佛蘭西には珍らしい凹凸のある地面で只其缺點を云へば水の無い事である、又此處には鹿が澤山居て秋の夜に此森の中を通ると、鹿の呦々として鳴いて居るのが一種の清幽な哀韻を帯びて、全く澤山幽谷の中でも歩いて居るやうな心持がする。

●佛蘭西の夏は太だ凌ぎ易い、春の野には日本と同じ様な野苧や蒲公英などもあるが、夏の佛蘭西には日本のや

うな蓮池が無い、唯だ河などの少し深い所や沼などになると水蓮が多くあつて、之は度々畫題として捉へられる、暑さは年に依つて多少違ふけれども先づ八十五六度位が通例であるやうに思ふ、だから着物などもさまで薄いのではなくとも通す事が出来日本のやうに単衣や浴衣を着ても暑い、裸でも暑いと云ふやうな事は無い、又全く蚊虻を釣るといふ事は無い水邊の森の中などには蚊や蚋も居るが町では先づ其心配が無い代り一番閉口するのは南京虫で、田舎の宿屋や穢ない寄宿舎には屹度居るものだ。

●巴里の夏で忘れぬのは公園である。巴里の公園は四季共に好いが、殊に夏が最も好い様に思はれる。此公園では夏になると、水道から水管を樹の下に引いて小規模の噴水を處々に作つて居る、樹木や芝生が此霧に濡れて青々して居る、夕方になると巴里市中の人が涼を趁ふて玆に集まつて來るのであるが、夜、ロハ臺などに腰を掛けて涼んで居ると、前に云つた樹下の水管の細かい噴霧が限無い電燈の光線を受けて之に映じ、ダイヤモンドを粉にしたやうな水玉が絶えず公園の翠緑の間に飛び散つて居るのは見た許りでも涼しい感じを起させる。日本などの塵芥の多い暑い國では公園にこれ位の設備があつて欲しいものと思ふ。

●佛蘭西では、盛夏になつても中以下の生活者で避暑に往くやうな洒落た者は餘り無い、唯だ日曜などに、近在に散策を試みる位が關の山であるが、中以上の餘裕のある者では避暑にも往く、併し此の避暑にも二通りあつて、旅館に逗留する者と、別荘を持つ者とあるが、後者は先づ上の上の生活をして居る人で大抵の避暑は旅館生活か借家住居で、この點は東西何處も同じであるが避暑地での生活の様子は日本とは全然異つて居る、彼地にはカジノとて俱樂部の様なものがある、其處で憩んだり水や茶を飲み、午後には音楽を聽かせ夜は舞踏を催すつまり避暑

者の集會所と云つたやうなもので一週間何程、一ヶ月何程と云ふ切符を買つて極めて自由に出入する、別莊を持つて居る者でも時刻を極めて家族と共に其處へ行き音樂を聴くやうな事をする。海水浴の方は午餐前と夕飯前とが一番賑やかで、一時頃から三時頃までは海に入る者が殆んど無い、海に入るにも切符制度になつて居て、小さい車の附いた小舎を持つた番人が切符を受取て海に入る時の着物を貸したり其他の世話をする小舎は一人に一つで小舎に車の附いて居るのは汐の干満で其場所を轉じ得られる様にしたもので時化の時には鎖で繋いで在る、大抵の海水浴場は、濱邊が立派な往還になつて居る、即ち濱邊の崖になつて居る沙丘の上に煉瓦が敷いてあり、往來に向つて別莊や宿屋があり、カジノが中央部の重な場所にある、海水浴場には海岸の石段を下つて行く裝置になつて居る。

●海水浴場の特徴は、妙齡の乙女の多く集まることである、而して彼等は海水浴場に行つて殊に扮裝を凝す、午後四時頃から在らん限りの扮裝をして、カジノに来て音樂を聴くもあれば又海岸通を散歩するのもあつて誠に奇麗である。之には理由のあるので、平常都會では色々都合があつて自由に青年男女の交際も出来ぬから、海水浴の季節に玆處へ集つて其の夫を選ぶ、また親達も緩くり相談が出来る、つまり海水浴の季節は一種の縁談期になつて居るやうだ、夏に話を取極め、冬になつて結婚すると云ふ事になる、だからお嬢さん方が其の扮裝に意を凝すことは驚いたもので、自分の知合の内の娘は帽子を十二三箇も持つて海水浴に往つた事があつた。海水浴場の外には、山の近い所には温泉場がある、矢張海水浴と總てが似て居て例のカジノの設備も充分に整つて居る。

●巴里城外の遊び場と云つたらセーヌ河の蒸汽に乗つて川上か川下の一寸した田舎へ行くか或は汽車に由つて市

外二二里の邊へ出るかであるさう云ふ巴里人の行慣れた處には、奥の植半と云つた様な亭などのある小料理屋があつて、屋外で飯を食はせる、川魚の天麩羅などは中々甘い又子供の爲には音樂附のぐる／＼廻る木馬などがあつて大人も無邪氣になつて一緒に遊ぶ。又茶屋へ行かずに芝原で持參の辨當を食ふ人もある而して歸りには月を帯びてセーヌ川を遡るなどは風流極まる、要するに佛蘭西の夏は日本の夏に比して凌アツクき好くもある、遊び場も却々多い。

●夫れに佛蘭西では地震を知らず、雷鳴も少ない、又何の加減か精神が何時も爽快で仕事が自ら勇んで遣れる、實に好い國である。

『日本及日本人』五三九 明治四三年八月